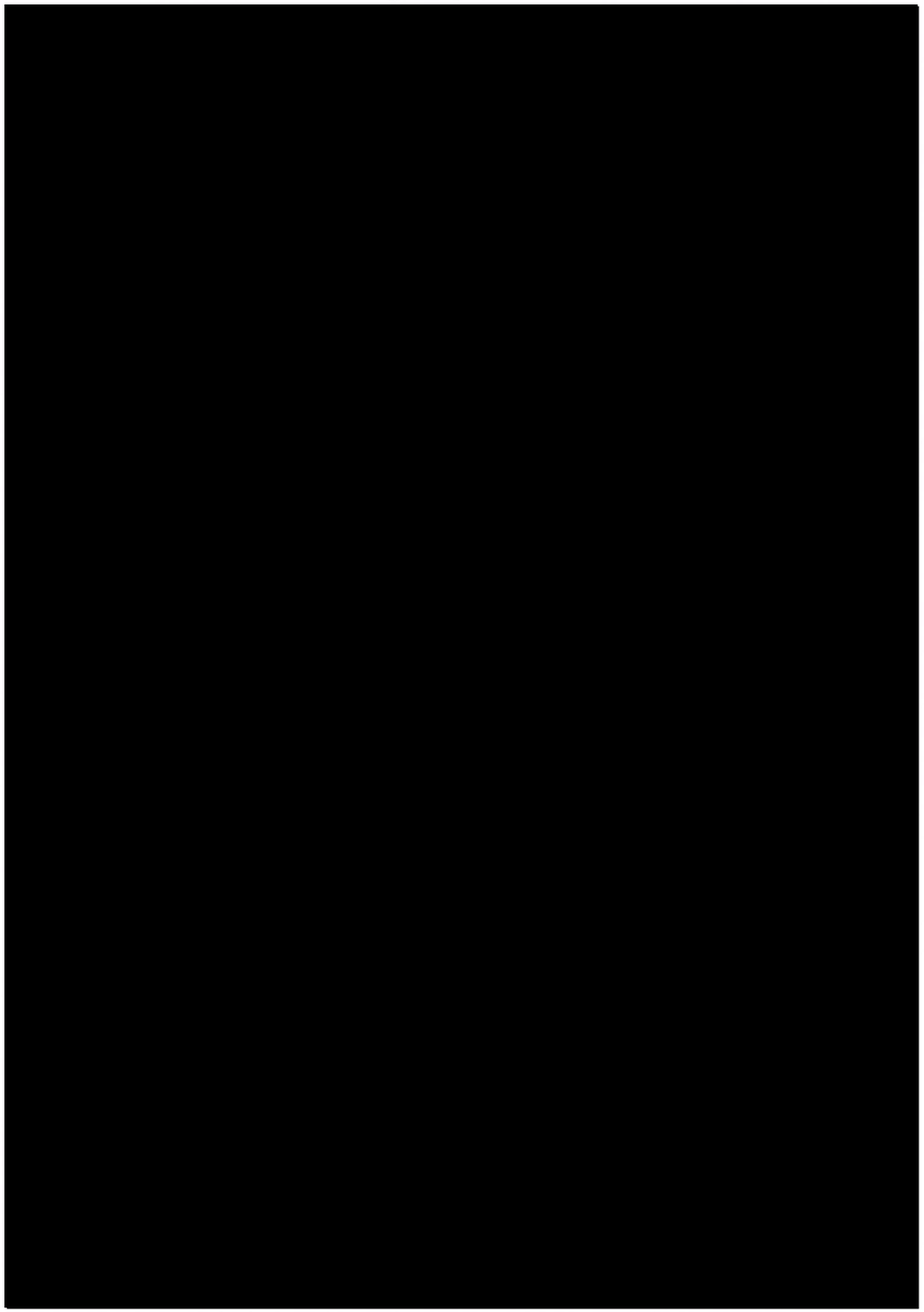

國なまり

永代美知代

『アラお慶さん！　一寸待つて頂戴よ、御一緒に行きませうよ。』

仲よしの後藤さんから呼び掛けられても、慶子は聞えないかして、寮の廊下を彼方向きに、お下髪の端を揺がせながら、右の手で欄干を叩き〳〵拍子を取つて、頻りに口三味線か何かを歌つて歩きます。

『一寸とお慶さんてば！　お慶さん！』

後藤さんは一聲高く呼びました。

『何やいな。』

斯う柔らかな京のなまりをそのまゝに、振り向いた慶子は、立止つて相手を待ちました。

『誰かと思たら後藤さんかいな、お慶さん、お慶さんて、騒々しいお人やしなア。』

『幾ら呼んでも知らん顔してるんだもの。』

『妾待つとるよつてに、早う驅けてお越しんか。』

『ほゝゝ夏やすみから以來、あなたは又妙な言葉を使ふやうにお成りなすつてねえ。』

後藤さんは笑ひながら傍へ寄り添ひましたが、心では何とも云へぬ無邪氣な少女だと、慶子を懐かしんで居るのです。

『可笑しい？』

『可笑しいつて事も無いわ、だけども變よ、ね、あなたも皆なと同じに、東京の言葉におなんなさいよ、郷に入つては郷に從へつて諺もありますわ。』

『えゝあたしもさうしたいと思ふのよ、さう思つて居ても、つい故郷なまりが出て了ふのすせ。』

『そら又！』

『ほゝゝそやから故郷へ歸ると東京訛りが可笑しい

つて、皆なして妾一人を笑物にしやはるんどすもの、妾もう叶はんえ。』

慶子は如何にも困つたらしく悄氣ました。十四と云つても年弱な生れで、體もちんまりと小柄な慶子は、年よりも何處か餘計に子供々々しく見えました。上方風の丸ぽちやで、拔ける程色白な、心持ち眼尻の下つた、笑ふと貫き刺しでもしたやうな細く深い笑魔を湛へた、その容子の可愛さと云つたらありません。

『まア一寸、可愛い方！』

京染の古雅な更紗縮緬の袷に、赤地錦の中幅帶を、たて矢の字にキチンと結んで、此の春初めて此校の寮舍へ入つた慶子は、寮の姉樣達から齊しく愛好の眼を向けられました。

『あなた何てお名前？』

『兼松慶つて云ひますのや。』

慶子は訊かれる度に、ハツキリ答へましたが、

『おくには京都でせう！』

『さうどす。』

だが流石に斯う星を指されると、慶子は赤くなつて、兎のやうに逃げ出すのが癖でした。ですが新入生に有り勝ちな、いやにはにかみつぽい點は微塵もなくて、訊かれゝば何でもハキハキ、無邪氣なおくになまり丸出しでものを云ひました。

『學校一のベビーさん！』

誰云ふと無く、慶子のあだなは斯う定められて了ひました。

『好いわ、そんなに氣を揉まなくたつて、今に段段直つて來るかも知れないわ、ねお慶さん、私の云つた事氣にしないで頂戴な。』

眉をひそめて、如何にも困つたらしいお慶さんの表情を見てゐると、後藤さんは堪らなく氣の毒になりました。

『さう、直るでせうか。』

『直りますとも、大丈夫直つてよ、ね、それよりかお庭でも歩きませうよ。』

『さうね、もう菊が咲いたかも知れんえ。』

寮から講堂裏のガーデンへ續く小徑を話しながら歩いて行くと、テラースを隔てゝつい傍の教師

館の横手に、水色絹のジャケツに薄鼠のスカートを着けた教師が、脊後向きに立つて居る。それを取り卷くやうに、仕事師らしい、淺黄色のバッチを穿いて、色の褪めた印袢纏を引かけたのが、五六人も突立つてゐました。

『キーッ先生のやうだわね、何でせう？』

『行つて見ませうか。』

二人は急いでテラースを登つて行きました。

『ミナサマ、ワカリマセン？』

自分から首を傾げて、キーッ先生が斯う、センの處へ馬鹿に力の籠つた調子で訊きますと、仕事師の一人は異人の句調を眞似て云ひ切りました。

『ワカリマセン。』

『ミナサマ、お中食アガラハリマシタラ、又今度他の用事アルヨッテ、來トクリヤハリマセ。』

一句一句靜かに繰り返して云つたキーッ先生の言葉が了るか了らぬに、仕事師達はどつと吹き出して笑ふのでした。

『ワカリマセン？』

先生は顏を赧らめながら、根よく訊き返して、對手に解つて居ないのが知れると、今一度丁寧に繰り返しました。と又仕事師達は一齊に吹き出しました。

『アラまア如何しよう！』

丁度傍へ來て聞いて居た慶子は、突然赤くほてつた顏を袖に隱しました。

『如何なすつたの？』

『妾先生に濟まないわ、今の言葉は何の氣もなく、皆な私が敎へてあげたんですもの、京のなまりやから、東京の仕事師に解る筈おへんえナ。』

『ほゝゝさう！』

年上の後藤さんは笑ひながら、つとキーッ先生の身近く寄りました。

キーッ先生は最う五六年も日本に住つてゐて、かなり日本語がつかへます。ですがまだ中々、思ふ事を自由に話すと云ふ譯には行きませんので、必要な場合々々に、生徒から敎はつたり、知り合ひの人か

ら習つたりして居りました。今日は朝からペンキ塗りの職人達を大勢使つて居ましたが、用事の都合で職人達に命じたいと思ふ事が、どう云つて可いか解りません、折よく通りかゝつた慶子を呼び止めて敎はりました。無邪氣な慶子は何の氣もなく京なまりで敎へたのでした。

『先生、代つて云つてあげませう。』

『おゝエース、プリース！』

後藤さんの言葉を聞くと、平生つとめて日本語ばかり使ふやうにして居たキーッ先生も、嬉しさについ故國の言葉をお出しになりました。中食後にして貰ひ度いとお思ひになつて居た用事など、手早くペラペラ早口に云つておのけになりますと、職人達は呆れたやうに先生と後藤さんと、二人の顏ばかり見守つて居りました。

『それではねえ皆さん。』

斯う後藤さんは通譯して聞かせました。

『偉いもんだナ娘つ兒でも、流石は女學生だい、異つたもんだ！』

讃めるのだか何だか、後藤さんは極り惡げに下等な人達の傍を離れて、慶子の後へよけました。

『どうも有り難う、おかげでたすかりました、有り難う。』

キーッ先生は又ふだんの通りに、御自慢な日本語を使つて、二人に寄り添ひながら、莞爾やかに會釋をなさるのでした。

『ほゝゝ先生は全く日本語がお上手ですこと、ねえ慶子さん。』

後藤さんが云ひますと、先生は烈しく首を振りました。

『如何して駄目あります、ワタクシの言葉、時々通じません、ティデンあります。』

『ほゝゝ』

後藤さんは心から可笑しさうに笑ひました。だが慶子は先刻の事が氣の毒でたまりません。

『先生、御免なさい、私なまりなんか敎へて濟みま

せんでした。』

顔を眞赧にして詫びますと、先生は不思議さうにその顔をまじ〳〵と見守りました。

『ナマリ、ナマリブシ――』

『違ひます先生！』

後藤さんは手眞似と一緒に先生の言葉を打ち消した。

『お慶さんの教へた言葉は些少と復雜でしたから、それであの人達には解らなかつたでせう。』

『フクザツすぎた、さうですね、フヽン。』

『フヽン』と鼻の先きで云ふのはこの先生の癖でして、別に冷かすの何のとさう云つたつもりはないのです。

『御覽なさい、ワタクシのお寫眞です。』

中形の狀袋から取り出して、先生は二人の眼の前に、艶消しの寫眞を見せました。

『まア。』

二人が見入つて居りますと、

『一枚づゝあげませう、今日のキネンに。』

『まア有り難う、頂きます』

思ひがけない贈物なので二人共全く喜びましたが、わけても慶子の嬉れしさと云つたらありません。

『妾、嬉くて〳〵どんならんえ後藤さん、妾な、これで異人と混血兒と、二枚も寫眞がたまつたえ。』

『まアお慶さん！』

周章てゝ慶子を睨んで置いて、後藤さんは自分まで顔を染めました。

『そやかて妾嬉しいのやもん。』

慶子が氣がついて濟まなげに俯向きますと、復雜で訛の多い慶子の言葉の解らなかつた先生は、たゞ莞爾やかに二人を見比べました。（完）